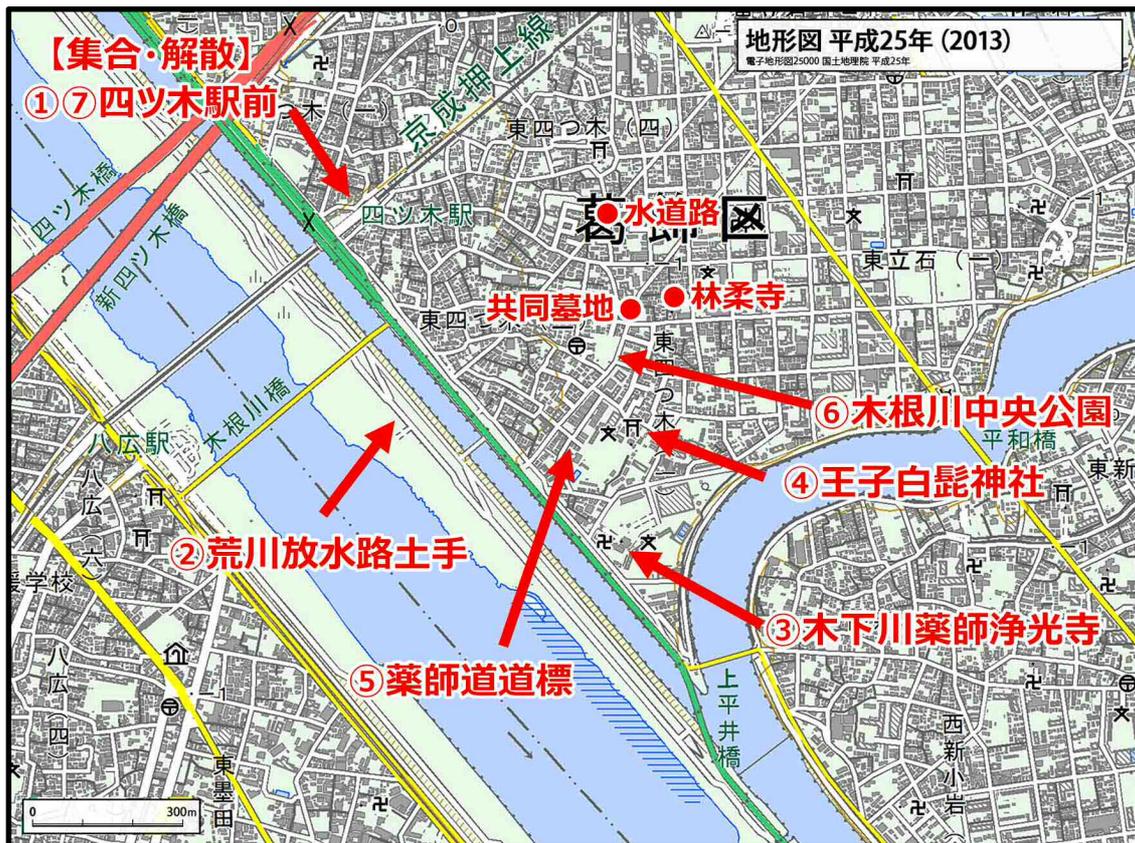


東四つ木に残る 徳川将軍と幕末志士の足跡

開催日時:平成30年6月9日(土)午前9時30分~12時

集合・解散場所:京成押上線「四ツ木駅」前



本日のルート

- ①四ツ木駅前【集合】
- ↓
- ②荒川放水路土手
- ↓
- ③木下川薬師浄光寺
- ↓
- ④王子白髭神社
- ↓
- ⑤薬師道道標
- ↓
- ⑥木根川中央公園(共同墓地・林柔寺説明)
- ↓
- ⑦四ツ木駅前【解散】

上木下川村

上木下川に比定する地名が歴史上現れるのは、応永5年(1398)8月の『葛西御厨田数注文』で、「上木毛河」と表記されています。葛西御厨とは葛西清重が伊勢神宮に寄進したとされる荘園です。

また、応永33年(1426)の奥津(藤原)家定寄進状(浄光寺蔵)にも、「下総国葛西庄上木毛河郷内～」という記載が見られます。このことから室町時代前期の時点で、下木下川(現、墨田区東墨田周辺)と分村していたことがわかります。

享徳3年(1455)に享徳の乱が勃発して以降、葛西地域は戦乱状態となりますが、最終的には、後北条氏の支配下に置かれ、永禄2年(1559)作成の『小田原衆所領役帳』では、朝倉平次郎の所領として記載されています。ただ、同史料では上下木下川の区別なく「木毛川」と記載されています。

「木下川」という表記になるのは江戸時代初期の慶安2～3年(1649～50)頃に江戸幕府によって作成された『武蔵田園簿』からです。ただ、同史料でも上下木下川の区別がないことから、室町時代末期～江戸時代初期にかけて両村は合併していたと考えられます。なお、両村が再び分村して、上下木下川となるのは元禄期以降です。

江戸時代を通して、上木下川村は葛飾郡西葛西領本田筋に属する幕府領で、幕府代官の支配を受けていました。また村内には浄光寺の寺領五石がありました。

明治時代に入ると、明治2年(1869)に小菅県、同4年に東京府、翌年実施された大区小区制ではいずれも、最終的に東京府第十一大区一小区に割り当てられました。同制度が廃止後の同11年からは東京府南葛飾郡に属します。

明治22年(1889)の市制町村制施行により、上木下川は一部を除き、下木下川村全域・大畑村の大部分・木ノ下村の大部分・須崎村飛地・請地村飛地・寺島村飛地・善左衛門村飛地・渋江村飛地・川端村飛地とともに大木村となります。

明治43年(1910)の水害が契機となって荒川放水路の建設が進むと流路にあたる大木村は大正3年(1914)に廃村となり、放水路以北が本田村、以南が吾嬬村に編入されます。上木下川村域も3分の1程度の面積が放水路となり、残りの地域ほとんどが本田村に編入され本田村大字上木下川となりました。(本田村は昭和3年に町制施行)

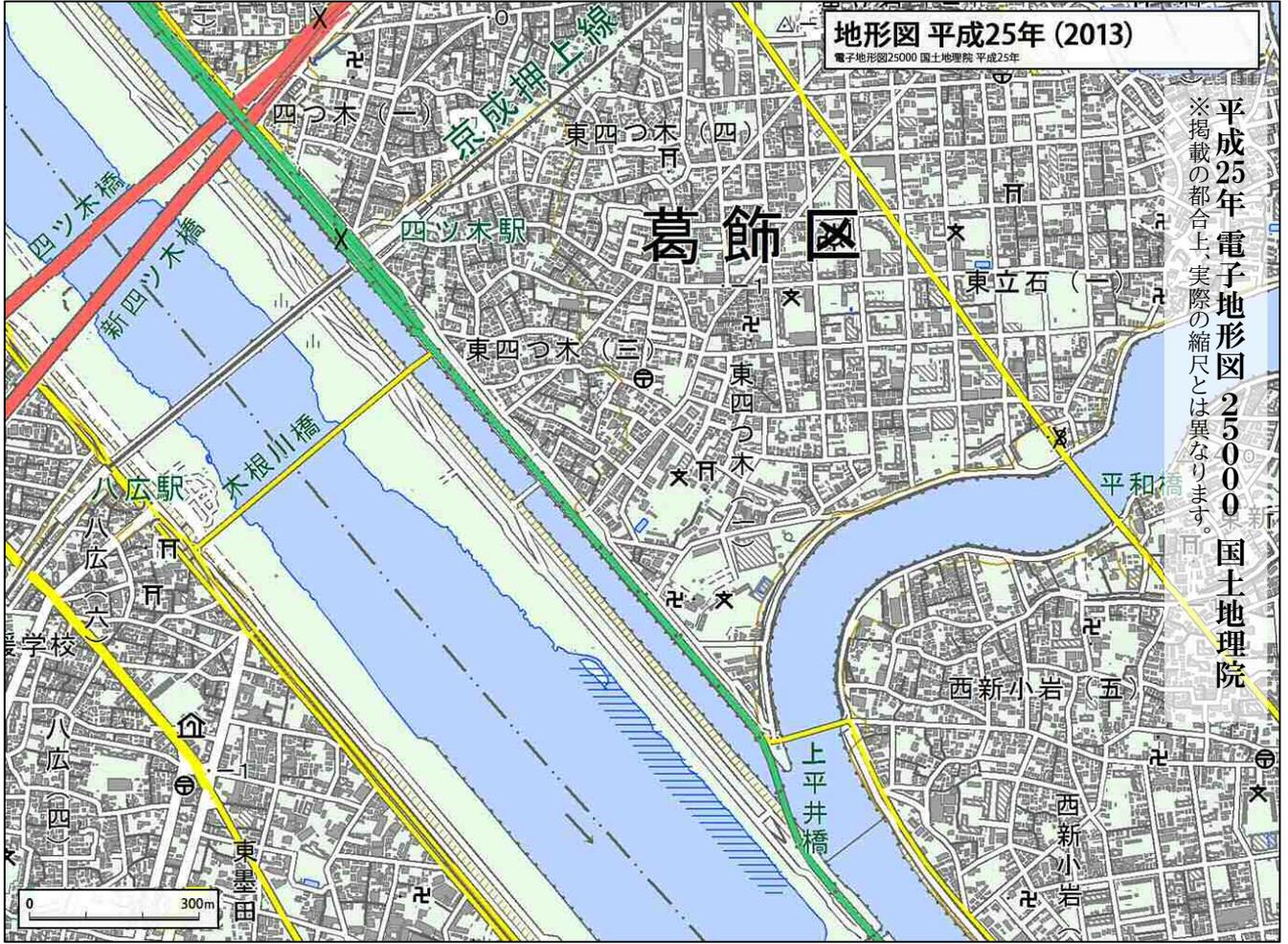
昭和7年(1932)の東京府葛飾区の誕生で、大字上木下川は、木下川が読みづらいことから木根川と表記を変え、本田木根川町となります。

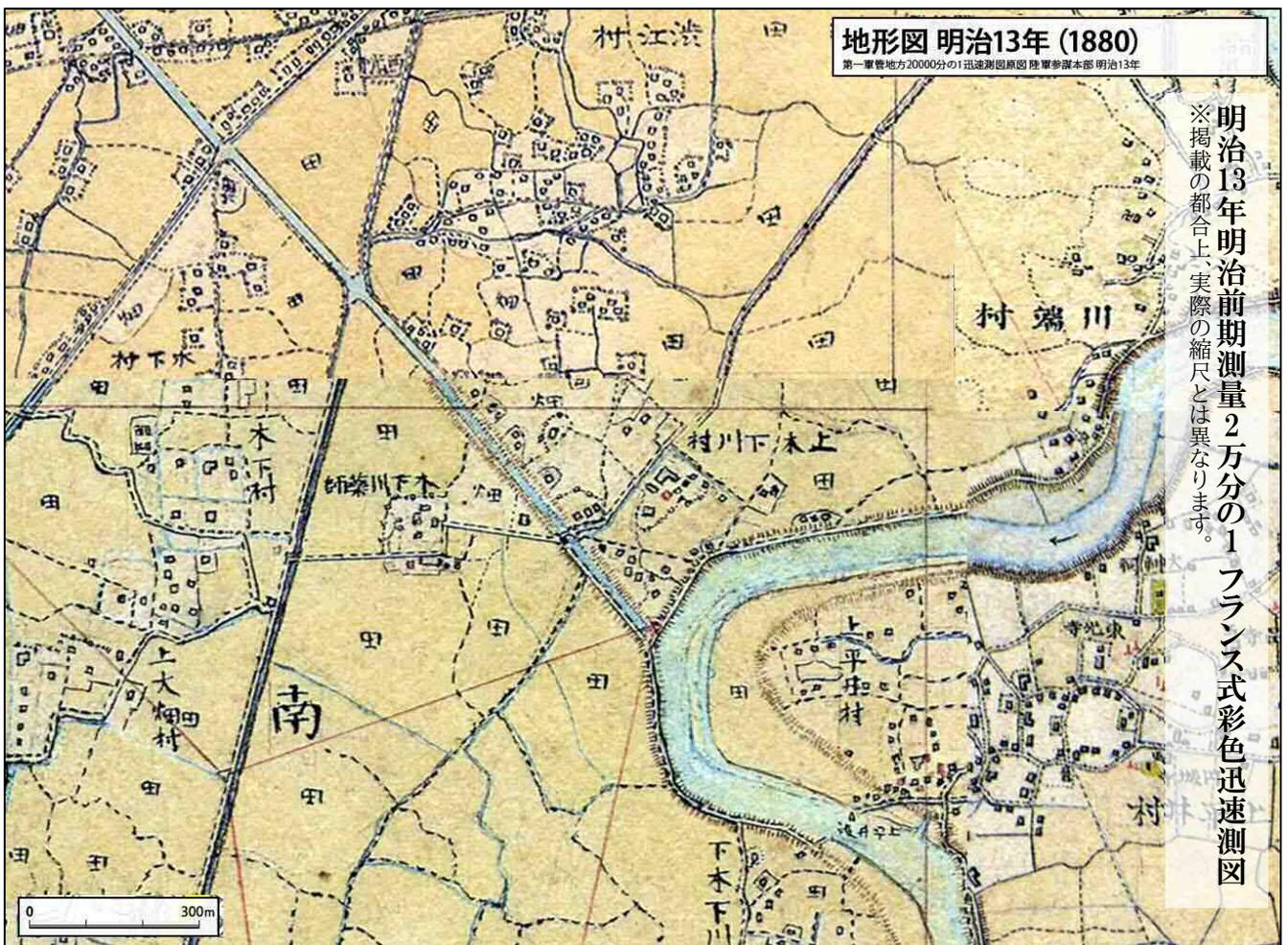
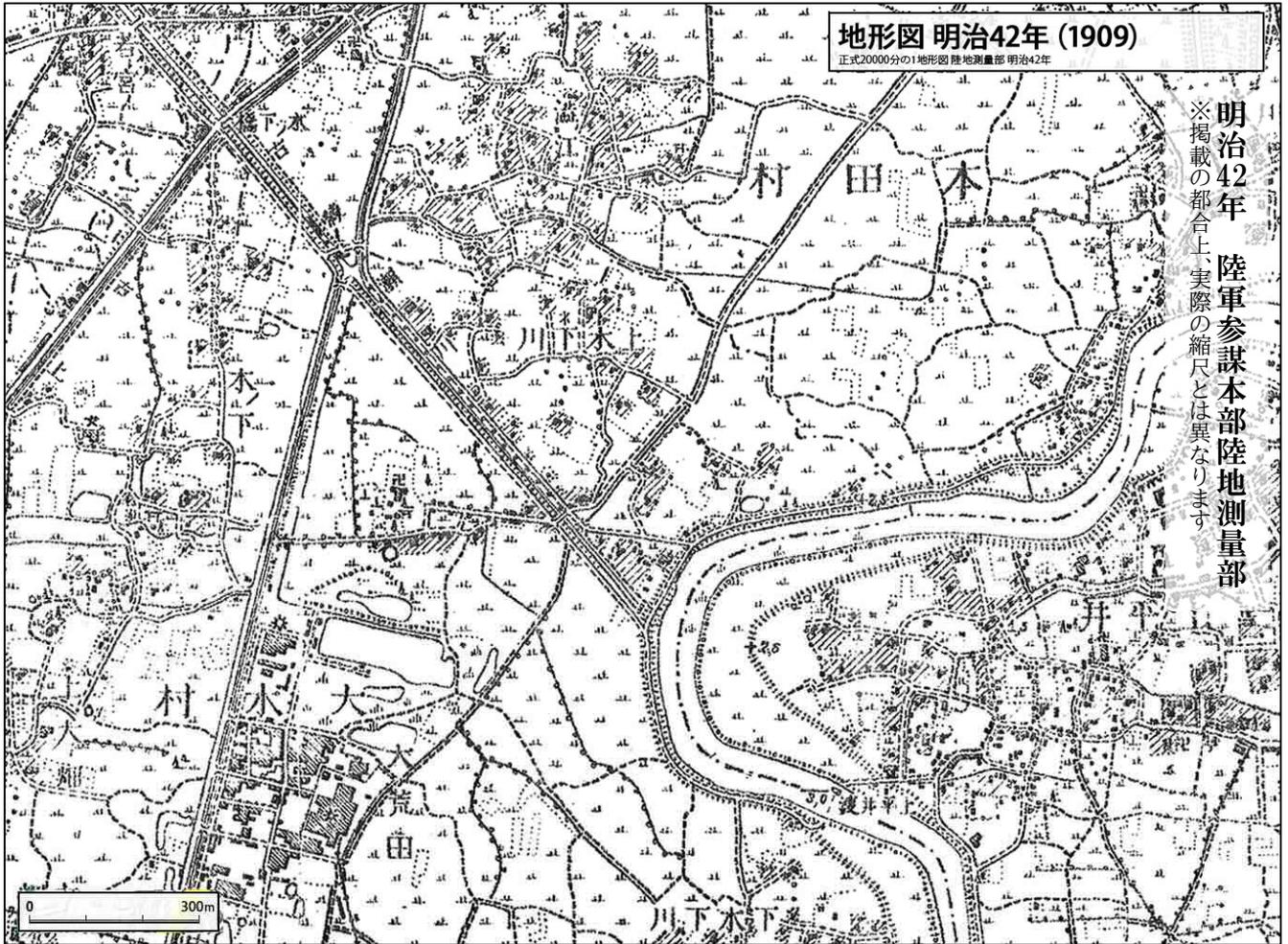
第二次世界大戦後の昭和38年(1963)から実施された住居表示により、本田木根川町の範囲は「東四つ木一～三丁目」に編成され、現在に至ります。

小 字

「塚越／王子免／大門先／綾瀬川耕地」
(新編武蔵風土記稿、江戸時代後期)

「塚越／西耕地／薬師前／綾瀬川」
(皇国地誌稿本 東京府誌、明治時代初期)







空中写真 昭和22年 (1947)

米軍撮影空中写真 昭和22年

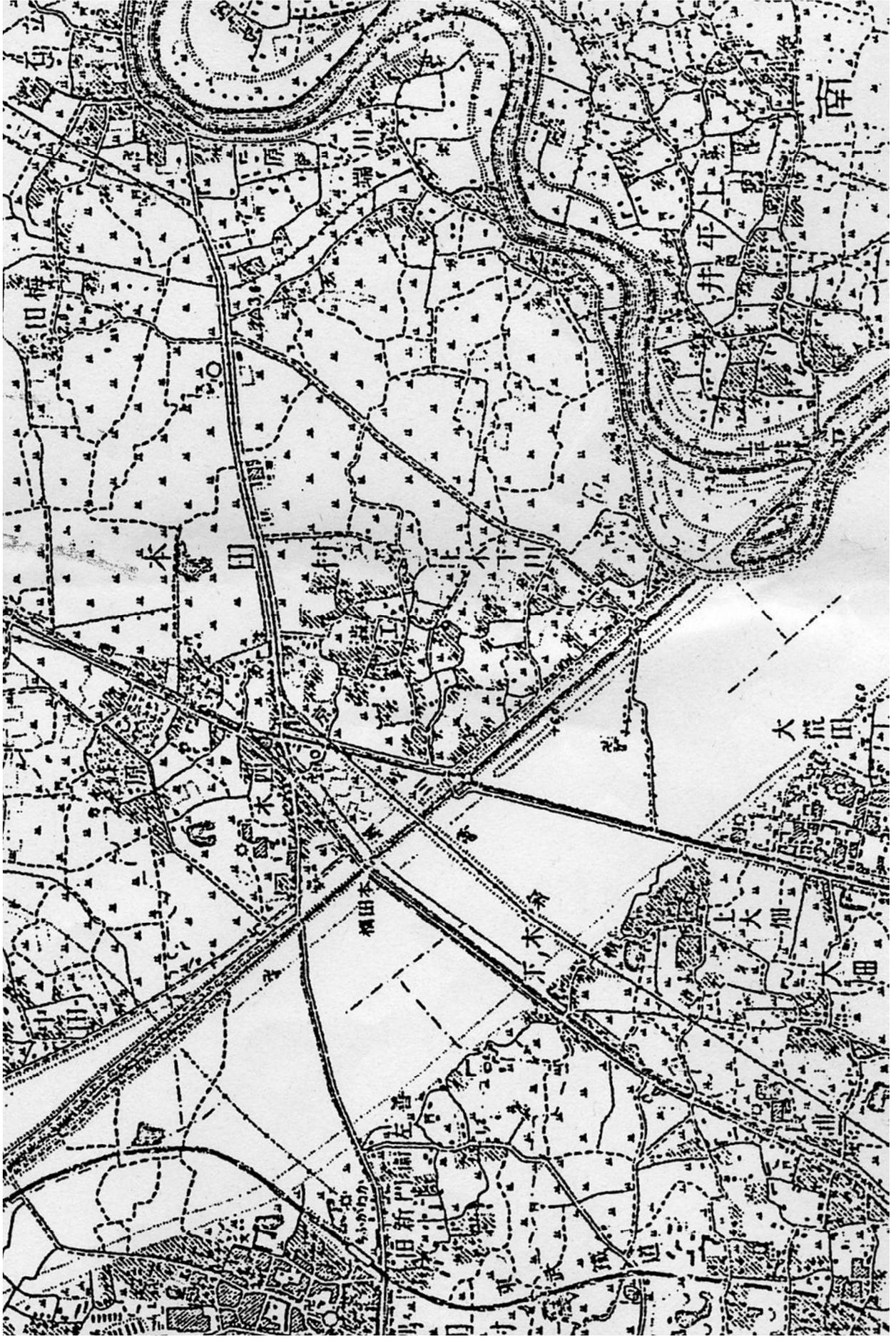
昭和22年11月 米軍撮影航空写真



空中写真 昭和40年 (1965)

国土地理院撮影空中写真 国土地理院 昭和40年

昭和40年 国土地理院撮影航空写真



大正8年地形図 陸軍参謀本部陸地測量部

浄光寺所蔵、葛飾区指定・登録文化財一覧

種別	名称
区指定有形文化財	絹本着色東照大権現(徳川家康)像1幅 附木造黒漆塗内箱及び外箱2口
区指定有形文化財	紙本墨画豊臣秀吉徳川家康甲冑像 2幅1対
区指定有形文化財	木造如来形立像 1躯
区指定有形文化財	木造金剛界大日如来坐像 1躯
区指定有形文化財	木造千手観世音菩薩立像 1躯
区指定有形文化財	木造釈迦如来及両脇侍坐像 3躯
区指定有形文化財	木造慈慧大師坐像 1躯
区指定有形文化財	葵紋入御簾 1張
区指定有形文化財	藤原家定薬師堂別当職并寺領等寄進状 1通
区指定有形文化財	青龍山薬師仏像縁記
区指定有形文化財	徳川家康書状 1通
区指定有形文化財	徳川家光・三世御ちキリ 1通
区指定有形文化財	浄光寺近世文書 36点
区指定有形文化財	加藤ひな子の碑 1基 附 山田顕義風折烏帽子の碑 1基 空齋山田伯造墨碑建設者名簿の碑 1基
区指定有形文化財	木造金剛力士立像 2躯
区指定有形文化財	木造山号扁額 1面
区登録有形文化財	櫃(非常持ち出し用)
区登録有形民俗文化財	浄光寺のみくじ道具



天保元年（1830）「新編武蔵風土記稿」薬師堂境内図 独立行政法人国立公文書館

『特別展 平成かつしか風土記 ～地域の継承と文化財～』展示図録から転載

浄光寺と将軍家

葛西領に現存する最古の中世文書を所有する浄光寺は、徳川2代将軍秀忠が江戸城内紅葉山に造営した御霊屋の別当職に任命されたため、将軍家と深いつながりを持ち、「木下川の薬師さま」として篤い信仰を集めました。

8代将軍吉宗の時代に鷹狩が復活すると、鷹狩の際に将軍が休憩や食事をする御膳所に定められました。鷹狩好きであった吉宗は年に10～20回鷹狩に赴き、享保5年(1720)には葛西方面へ6回訪れ、浄光寺にも立ち寄っています。同寺には、将軍が訪れた際の記録である『御成記』が残されています。現存するのは文政4年・天保2年(家齊)、弘化4年・嘉永5年(家慶)、嘉永5年(家定)の時の記録です。

さらに江戸時代の地誌や紀行文にも数多く登場する同寺は、杜若の名所でもあり、江戸近郊の行楽地として多くの参詣客がありました。

■絹本着色東照大権現(徳川家康像)1幅 附 木像黒漆塗うち箱および外箱2口

指定有形文化財 縦79.0・横41.4cm

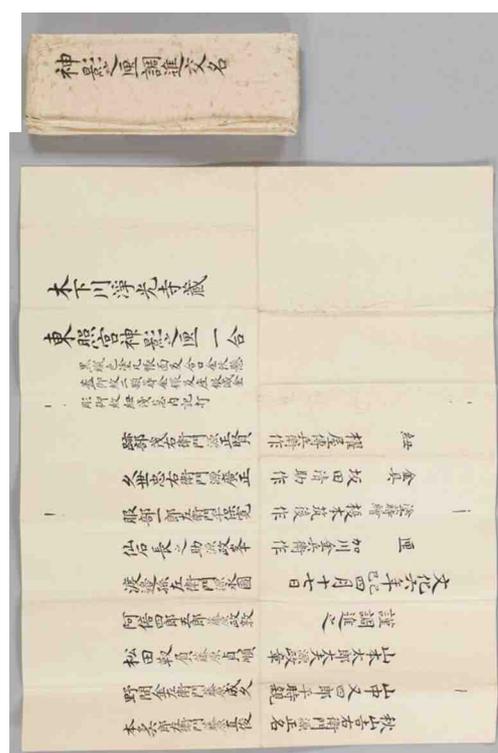
徳川家康の衣冠持笏像は、東照大権現の神影として江戸時代初期に狩野探幽が描いたものとして伝えられています。

浄光寺所蔵の明暦3年(1657)住持忠善による「青龍山薬師仏像縁起」に、天海大僧正が自ら讃を書きそえ、浄光寺の住持忠善にあてた経過が記されています。



徳川家康の画像は各地にみられますが、浄光寺の画像は、静岡県静岡市久能山東照宮所蔵のものと、同一の下絵から敷写されたかと思われるほど類似しており、同じような画像の中でも最も優れたものの一つです。

現在の表装は当初からのものではなく、箱は2口とも文化6年(1809)の製作です。



浄光寺と幕末志士

旧幕臣であった勝海舟は、明治10年(1877)の西南の役による西郷隆盛(南洲)の死を悼み、同12年7月追慕の漢詩と南洲の詩文を刻した留魂碑を浄光寺境内に建碑しました。同時に石造留魂祠も建てています。明治13年(1880)の迅速測図には、境内北東角にあった「南洲碑」と碑の景観が描かれています。



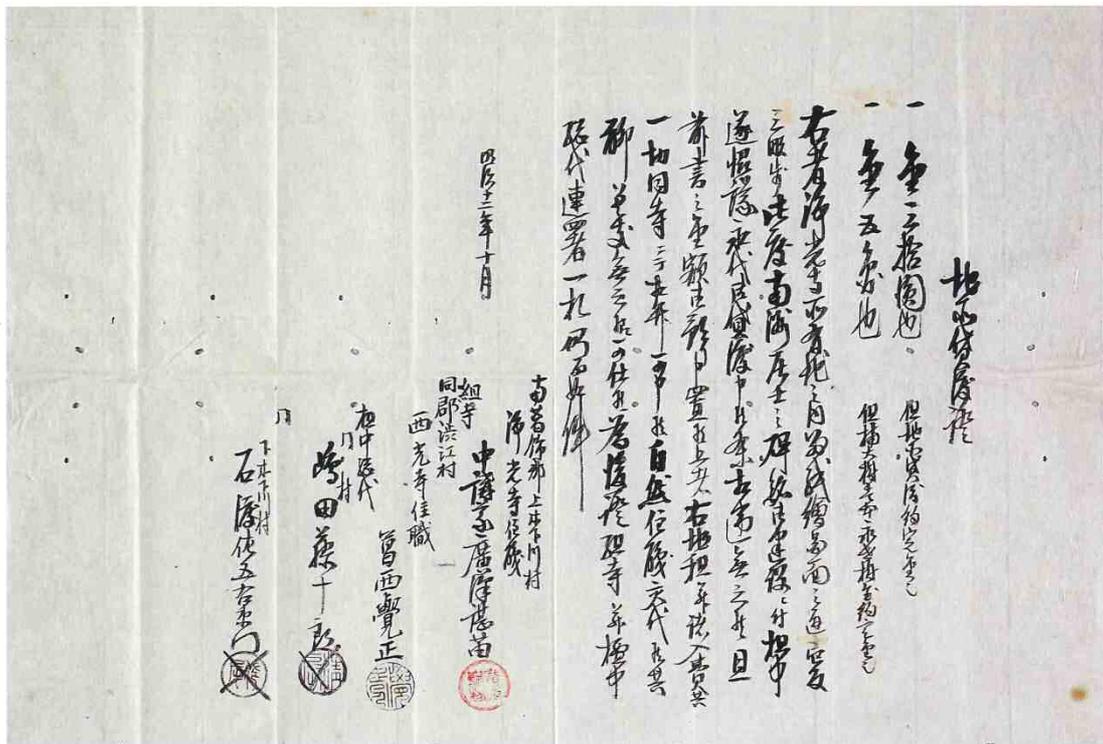
浄光寺境内西郷南洲碑

迅速測図にみる浄光寺境内西郷南洲碑

詩文は、島津久光により文久3年(1863)4月徳之島から、6月沖の永良部島へ禁固された時、南洲が詠んだ獄中有感(ごくちゅうかんあり)です。

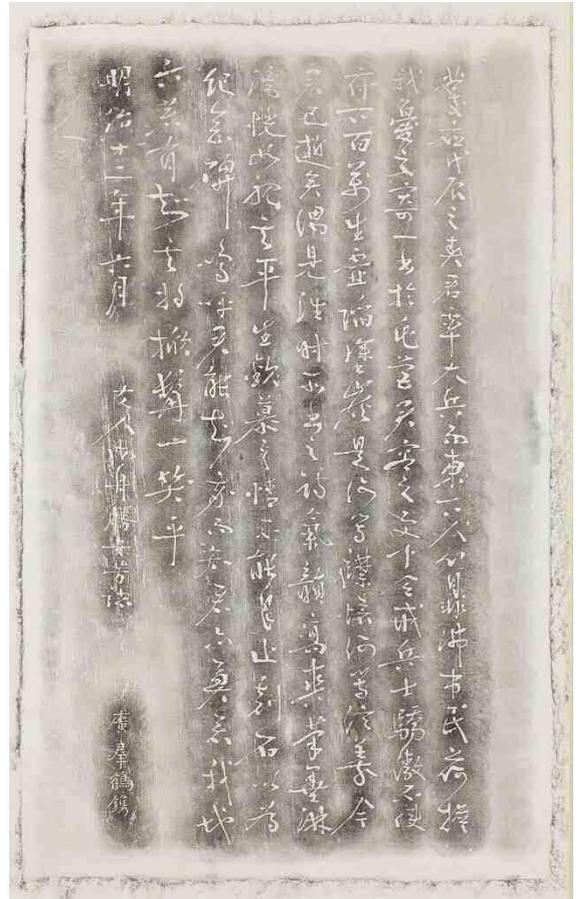
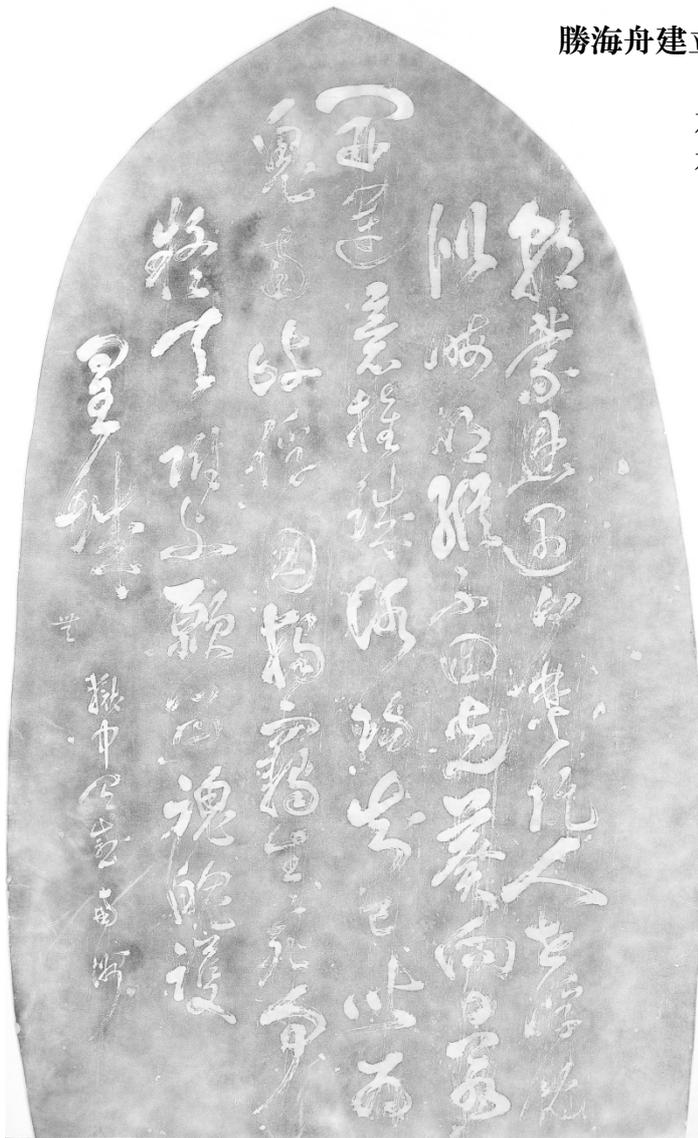


明治12年(1879)10月「地所貸渡証」によれば、「南洲居士之碑銘」建設のため、1反3畝歩が、浄光寺から勝家に永代に貸し出されています。図面に描かれた円形は「楠大樹」で、この枝払いの代金を含め、総額35円の契約でした。



勝海舟建立 西郷南洲(隆盛)留魂碑 (拓本)

左:表面 南洲詩文「獄中有感」
右:裏面 勝海舟追慕漢詩



朝蒙恩遇夕梵坑
人生浮沈似晦明
縦不回头光葵向日
若無開運意推誠
洛陽知己皆為鬼
南嶼俘囚独窃生
生死何疑天附与
願留魂魄護皇城

朝に恩遇を蒙り、夕に梵坑せらる
人生の浮沈、晦明に似たり
縦ひ光を回らさずとも、葵は日に向ひ
若し運を開く無くとも、意は誠を推す
洛陽の知己、みな鬼と為り
南嶼の俘囚、独り生を窃む
生死何ぞ疑はん、天の附与なるを
願はくは魂魄を留めて、皇城を護らん

慶応戊辰の春、君率大兵而東下。人心鼎沸。市民荷担。我憂之。寄一書於屯營。君容之。更下令戒兵士驕傲。不使府下百万生靈陷塗炭。是何等襟懷。何等信義。今君已逝矣。偶見往時所書之詩。氣韻高爽。筆墨淋漓。恍如視其平生。欽慕之情不能自止。刻石以為記念碑。嗚呼君能知我。而知君亦莫若我。地下若有知。其將掀髯一笑乎。

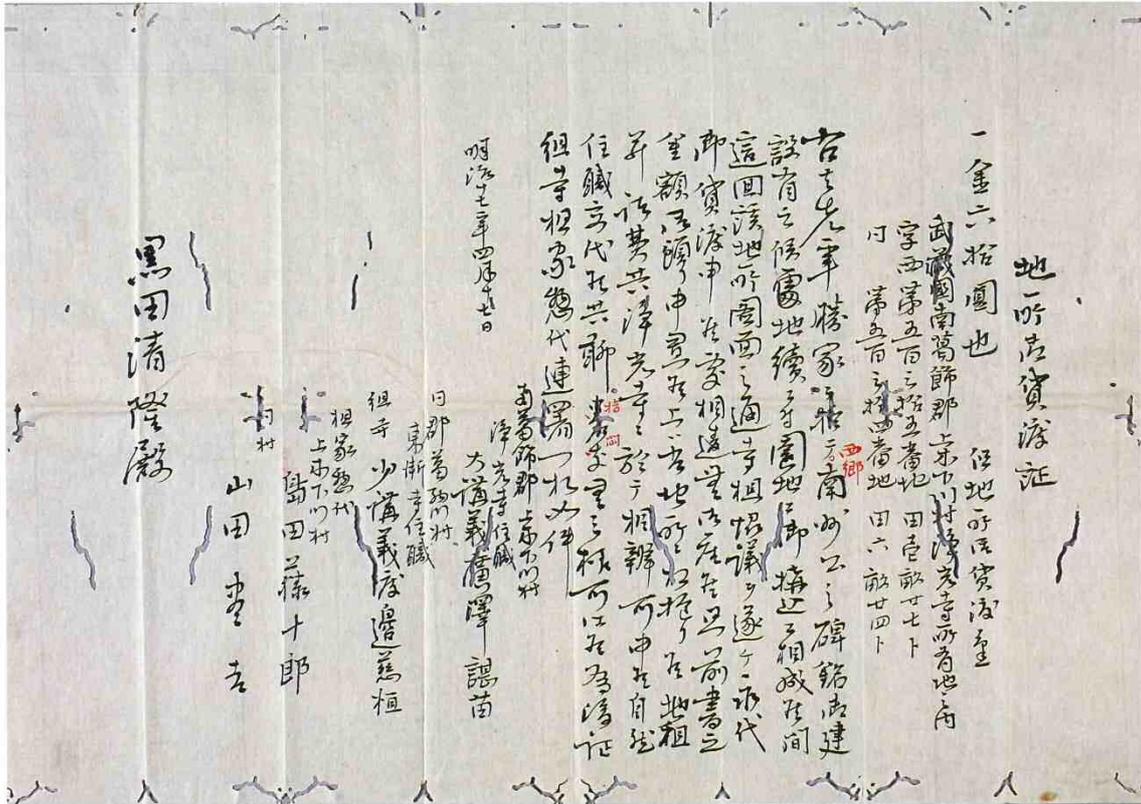
明治十二年六月 友人勝安芳誌

慶応戊辰の春、君大兵を率いて東下す。人心鼎沸、市民荷担す。我之を憂へて、一書を屯營に寄す。君之を容れ、更て令を下して兵士の驕傲を戒め、府下百万の生靈をして塗炭に陥らしめず。これ何らの襟懷、何らの信義ぞ。今君已に逝たり。たまたま往時書する所の詩を見る。氣韻高爽、筆墨淋漓、恍として其の平生を視るが如し。欽慕の情、自ら止む能はず、石に刻して以て記念碑と為す。ああ君よく我を知れり、而して君を知る亦我に若くは莫し。地下もし知る有らば、それ將に掀髯一笑せんか。

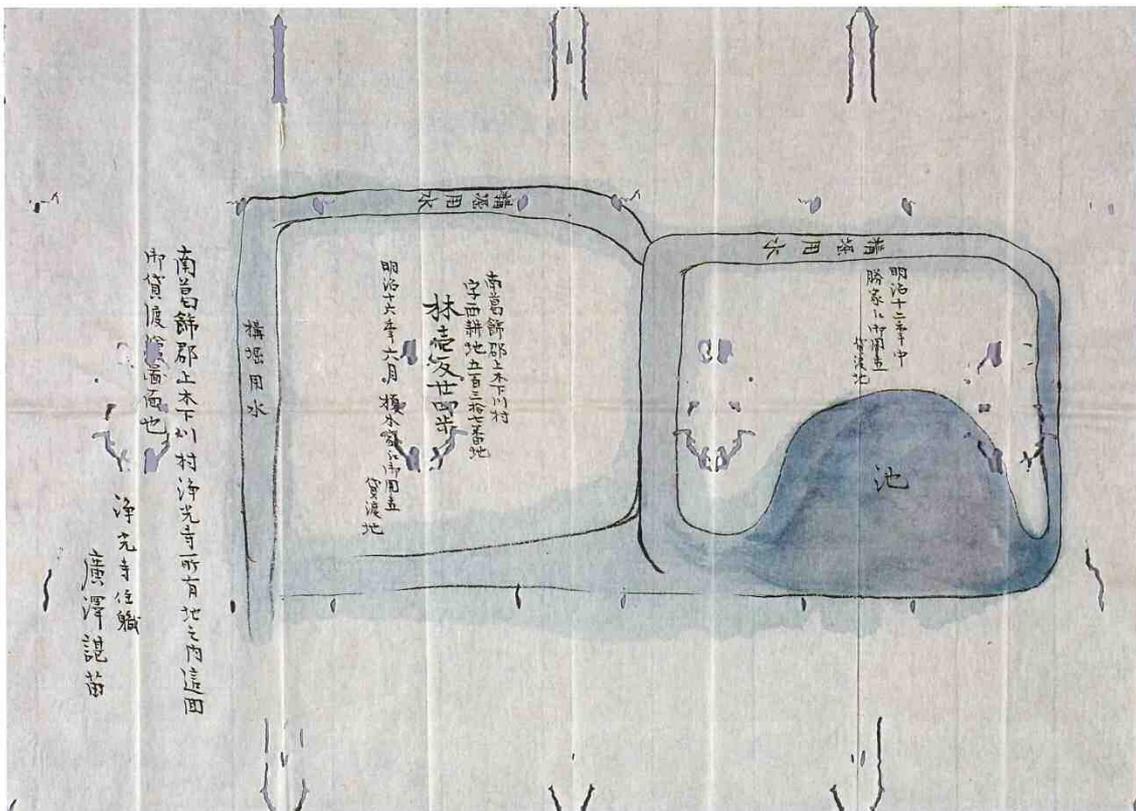
明治十二年六月 友人勝安芳誌す

明治17年4月17日には、明治12年の勝家への貸渡地に隣接した2区画を薩摩閩の重鎮黒田清隆に貸し出す証文が残っています。

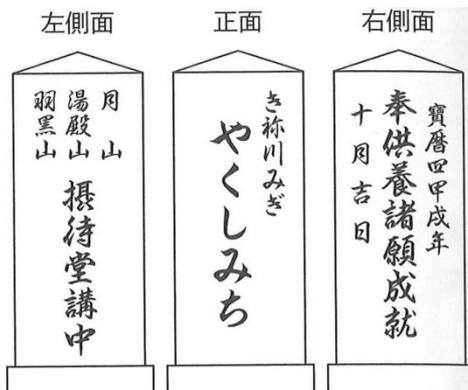
これらの史料は、浄光寺と旧幕臣との関連を解明する今後の糸口となりましょう。



勝家への貸渡地の隣には、明治16年6月に旧幕臣榎本家への貸渡地もありました。地目は林1反24歩でした。



薬師道道標 (東四つ木1-8-7)木根川小学校正門そば



年 代 宝暦4年 (1754)

大きさ (道標) 幅 42cm
 奥行 42
 高さ 114
 (台石) 幅 68cm
 奥行 71
 高さ 29

願主 善左衛門村 大畠村 祐禪坊 上松吉郎兵衛	木下村 南蔵坊 森野惣兵衛
智光院 吉田善兵衛 息雲坊 幸山安左衛門	圓長坊 同平四郎
瀧善院 白田金左衛門 満蔵坊 同五郎右衛門	清山坊 宇田川安右衛門
善乗坊 同長右衛門 福性坊 増田半右衛門	明德坊 増田九兵衛
恵明坊 同次郎兵衛 千光坊 宇田川彦兵衛	善憲坊 畠利兵衛
寺嶋村 小梅村 行山坊 森田善右衛門	全性坊 大沢三良右衛門
桐雲院 鈴木平吉 法光院 鳥井助五郎	宝木塚村 正行坊 森谷善左衛門
覚明坊 金古源右衛門 宝蓮院 宇田川伊右衛門	慈雲坊 関口由兵衛
大泉坊 齊藤佐五右衛門 妙音坊 石川三四郎	永源坊 同利右衛門
自性坊 原山長三郎 行学坊 森田金四郎	善休院 相川安右衛門
□善坊 神尾忠□衛門	□坊 松田勘左衛門
下千葉村 善休院 相川安右衛門	□坊 松田勘左衛門

王子神社(王子白髭神社)

社 号:王子神社(王子白髭神社)
 祭 神:貞辰親王尊・猿田彦命
 鎮座地:葛飾区東四つ木1-12-26
 沿革:『東京府志科』上木下川村の条に、「王子神社 社地三十六坪」とのみあります。社伝によれば、清和天皇の第七皇子貞辰親王(さだときしんのう)が東国遊行の途次、元慶元年(938)この地で亡くなりました。

偶然、浄光寺に滞在していた比叡山慈覚大師が良本阿闍梨に命じて、親王の遺骸を葬り、王子権現として慰霊を行ったのが始まりとなっています。以後、浄光寺がその古塚を管理していました。

浄光寺の鎮座地が荒川放水路の敷地となり、大正8年(1919)に浄光寺とともに現在地に移転、その際に上下木下川の鎮守で東墨田に移転した白髭神社(元は浄光寺境内にあり)を分祀しました。正式には王子神社ですが、地元では「王子白髭神社」と呼ばれています



浄光寺移転に伴う共同墓地記念碑(葛飾区東四つ木1-23)



大正五年拾壹月建之

者起発

石渡桑次郎
小久保與五郎
山田藤次郎
山田留吉
大橋松五郎
岩崎伊三郎
石渡長吉
浅岡大五郎
石渡作太郎
大橋市太郎
大橋林蔵
大橋鉄五郎

我先祖代々の菩提所わ天台宗木下川浄光寺にして
一千有餘年以來埋葬ありし墓地を此所に移したる
由來わ過し明治四拾参年八月大洪水ありてより荒川
綾瀬川中川の改鑿工事起り木下川の土地わ殆んど
買収せられ里人又浄光寺わ移轉するの止むなき事に至れり
故に発起者わ檀徒に謀り敷地を求め此地に墓地を移
さんと大正元年より奔走を始め苦心する事三歳
餘りに至り大正四年拾月を以て上木下川の墓地わ
許可となる茲に檀徒わ同五年九月中旬に遺體を改葬なしたる
記念の碑

現世を去りし親子の遺體を涙と俱に埋めまつりぬ
一元吾孀町書記戸籍課長 埼玉縣人渡邊友吉書之

上:碑文(表面)
左:碑文(裏面)

大きさ(本体概測)
最大高:131cm
最大幅:82cm
最大厚:20cm

林柔寺

山号:楊柳山

宗派:眞宗高田派

鎮座地:葛飾区東四つ木1-23-12

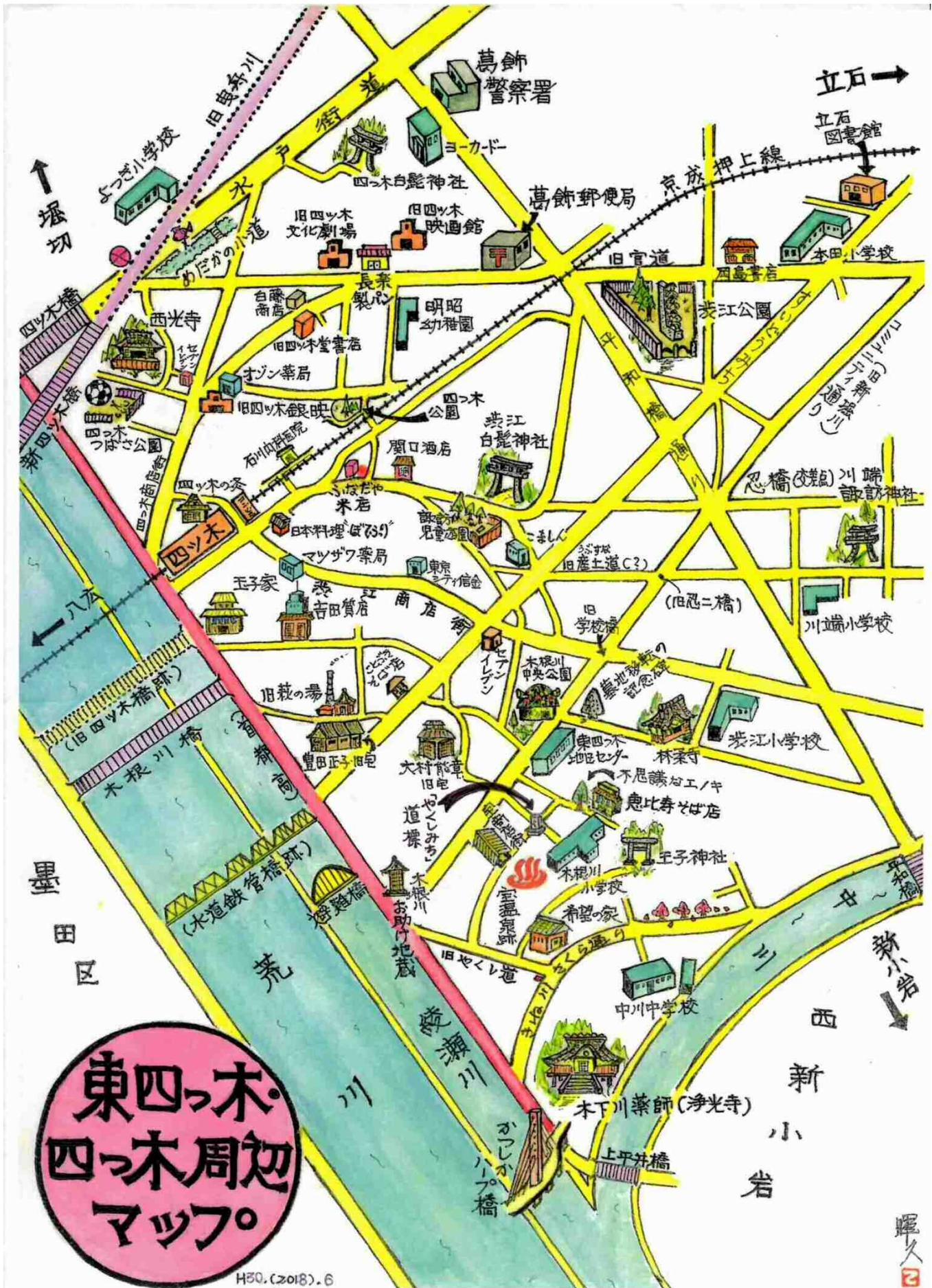
沿革:寛永7年(1630)に僧善長が日本橋馬喰町に創立したのが始まりです。当初は唯念寺の塔中で林昌軒と称しました。明暦3年(1657)の大火で焼失し、本寺とともに下谷稻荷町に移ります。その後、寺名を林柔寺と改めますが、大正12年(1923)の関東大震災で罹災し、昭和3年(1928)1月に、現在地に移転しました。

かつては、本堂に「従一位月光院殿理誉清玉智天」と記した位牌が安置されていました。月光院とは加賀出身の、後藤二郎左衛門の娘輝子です。父二郎左衛門は出家して僧侶となり、同寺に滞在している際に輝子を儲けます。

輝子は6代将軍家宣の側室となって阿喜与(おきよ)と称し、後の七代将軍家継を生みました。二郎左衛門は輝子の勧めで還俗すると、勝田玄哲と名乗り、三千石の禄を受けました。正徳2年(1712)将軍家継が8歳で没すると、輝子は出家して月光院と号します。その後、宝暦2年(1752)に没し、芝増上寺へ葬られました。

<主要参考文献一覧>

- ・葛飾区教育委員会『葛飾区寺院調査報告 下』昭和55年
- ・葛飾区教育委員会『葛飾区神社調査報告』昭和56年
- ・葛飾区教育委員会『葛飾区金石文(記念碑 梵鐘等)調査報告』昭和62年
- ・葛飾区『増補 葛飾区史』昭和60年
- ・葛飾区教育委員会『葛飾の文化財』平成8年
- ・葛飾区郷土と天文の博物館『かつしかの地名と歴史』平成15年
- ・葛飾区郷土と天文の博物館『かつしか風土記 文化財からのメッセージ』平成23年
- ・葛飾区郷土と天文の博物館『かつしかの文化財散策地図』平成23年
- ・葛飾区郷土と天文の博物館
『特別展 平成かつしか風土記 ～地域の継承と文化財～』平成28年
- ・町の文化と歴史をひもとく会
『木根川の歴史2 ～時の流れを超えて想う町の歴史～』平成22年
- ・町の文化と歴史をひもとく会
『木根川の歴史3 ー木根川・渋江・四つ木界限ー』平成25年
- ・町の文化と歴史をひもとく会
『木根川の歴史4 ー木根川・渋江・四つ木・立石界限ー』平成27年
- ・町の文化と歴史をひもとく会
『木根川の歴史5 木根川・渋江・四つ木 街歩きかるた』平成28年
- ・澤村英仁『「やくしみち」はどこに立っていたのか
木下川薬師への道ウォーキング』平成29年



東四ッ木・
四ッ木周辺
マップ

H30.(2018).6

暉久

石戸暉久氏画